# 都市住民を主体とした草刈りグループ結成のポイントと展開課題
## － 兵庫県東播磨地域におけるアクションリサーチ －

柴崎浩平（環境デザイン系）

**キーワード**：農村，草刈り，ため池，畦畔，コミュニティ・ビジネス

### 1. 背景と目的

草刈りは，畦畔やため池の堤体，水路，共有地など農村の至るところで実施される基礎的な資源管理作業である。しかし集落機能の低下や農業構造の変化に伴い，草刈りを継続して実施していくことが困難になりつつある。

筆者らは，地域における多層で多様な主体（マルチレベル・ステークホルダー）が協働する地域システムの構築を通して，草刈りの継続性を高めることを提案・構築を目指し研究を進めてきた（図 1）。草刈りは，農家や営農組織といった「集落レベル」での実施がベースにあるが，シルバー人材センターやビジネスセクターなど「広域レベル」での実施もみられる。しかし，双方のレベルにおいて疲弊している状況にある。多層で多様な主体が協働する地域システムとは，草刈りをメインに請け負うグループ（以下，草刈りグループ）を複数創造し，集落および広域レベルでおこなわれる草刈りを補完するシステムである。今日においては，様々な草刈りグループがみられだしているが，先行研究だけでなく，先発事例を概観しても，以下の 2 つの点で限界がみられる。

1 つ目は，構成員の限定性である。先発事例では，集落住民による集落の草刈りを担うグループの結成について注目が集まっている。しかし，集落住民・農家のさらなる減少や農山村に対する都市住民の関心の高まりを考慮すると，草刈り作業を補完する主体として都市住民を積極的に位置づける必要性・

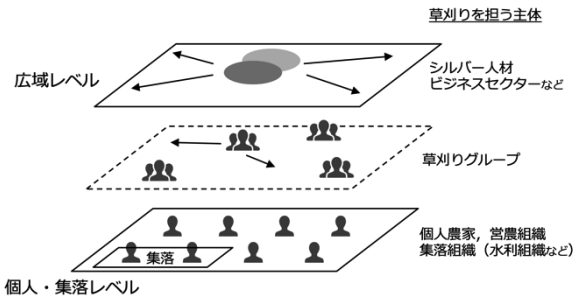


**図 1**　草刈りの担い手と草刈りグループの位置づけ

可能性は大きいと考える。

2 つ目は，草刈りの継続実施を問題視する際の視点の限定性である。草刈りが抱える問題構造は，草刈りの実施場所・実施主体によって異なる。通常，畦畔は耕作者・農地所有者といった個人レベルないし営農組合などの組織レベル，ため池の堤体や水路，共有地などは，水利組織や集落といった組織レベルで実施される傾向にある。一方，先行研究では，農業経営という側面から，畦畔の草刈りに着目した研究が多くみられる。そこでは，畦畔の草刈り作業が農業経営を逼迫させる一つの要因となっていることや離農を誘発する要因の一つとして問題視され，その解決に向けた研究が蓄積されつつある。しかし，畦畔だけでなく，農村の至るところで草刈りの継続実施が課題となっていることを踏まえると，農業経営だけでなく，地域づくり全般から草刈りを論じる必要もあると考える。

以上を背景とし，本研究は，都市住民を主体とした草刈りグループを実際に結成し，留意すべきポイントを明らかにすることを目的とした。そのうえで，複数の草刈りグループを結成していくにあたっての課題を整理する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 分析の視角

先行研究では，畦畔の草刈り作業に焦点を当て，主に集落住民で構成された草刈りグループの運営実態や課題[1)]，設立プロセスや要点[2)]が明らかにされてきた。しかし，都市住民を対象にした場合，これらの知見が援用可能であると言い切ることは難しい。なぜなら，草刈りに関わる動機が，集落住民と都市住民では大きく異なるためである。集落住民である場合，義務やしがらみのなかで，参加するケースが多いと考えられるが，都市住民の場合，当然のことながら草刈り作業に従事する義務はない。そのため，草刈りに関わる動機を把握し，そういった動機を反映した実施モデルを作成・運用することが

望まれる。

### 2.2 アクションリサーチ

調査方法は，アクションリサーチ（以下，AR）である。AR の特徴は，研究者がプレイヤーの一人となり，調査対象者とともに実践的な研究活動をおこない，学問的な成果だけでなく，社会そのものに直接的な影響を与える点にある。これまでの伝統的な実証主義的研究方法で求められてきた妥当性，信頼性，客観性，一般化とは一線を画した新しい世界観をもつ研究であり，特定の現場に起きている特定の出来事に焦点を当て，そこに潜む問題状況（課題）に向けた解決策を現場の人と共に探り，状況が変化することを目指すデザインである（筒井編 2010）。今日では，社会科学・自然科学を問わず，多分野で用いられており，農村計画学分野，農村社会を対象フィールドとした研究もみられる。

研究プロセスについては，高瀬ら[3]に見習い，①フィールドにおける課題の発見，②課題解決に向けた計画づくりと組織体制の構築，③課題解決のためのアクションの実施，④アクションの評価という 4 つの段階に整理して進めることとした。なお，アクションの評価については，今後，複数の草刈りグループを結成していくことを考慮に入れ，結成に至るプロセスを評価の対象とするプロセス評価の枠組みでおこなった。

### 2.3. 調査フィールドの概要

調査フィールドは，兵庫県南西部に位置する東播磨地域である。当該地域は，兵庫県の支所である東播磨県民局の管轄エリアであり，明石市，加古川市，高砂市，稲美町，播磨町の 3 市 2 町が含まれる。沿岸部は，重化学工業地帯となっている他，神戸市や姫路市のベッドタウンとしての側面を持つ。一方内陸部は，都市近郊農村が広がっている。当該地域の特徴の一つに，ため池が多いことが挙げられる。

筆者らは，当該地域において 2018 年 6 月より「東播磨フィールドステーション（以下，東播磨 FS）」を拠点として，ため池を中心とした資源管理に関する実践・研究を展開してきた[注1]。著者は，開室当初から東播磨 FS に週 5 日駐在し，コーディネートを務めてきた。本研究は，東播磨 FS で展開してきた研究・実践活動の一つである。なお，本研究の調査期間は，2019 年 4 月～2022 年 9 月となる。

**図 1** 東播磨の位置

## 3. 草刈りグループの実施モデルと実績

### 3.1 草刈りグループの概要

草刈りグループの概要を表 2 にまとめた。名称は「播磨畦師（はりまあぜし）」，設立日は 2022 年 6 月 14 日，メンバー数は 24 名である。実施内容は，草刈りがメインであるが，刈草の処理，水路の清掃，低木や竹の伐採・処理などもおこなっている。作業の実施エリアは東播磨地域全域，実施場所は畦畔およびため池堤体がメインである。価格は有料であるが，面積，土地・草の状況，年間実施回数，刈草の処理の有無などによって異なる。なお，急峻な斜面や数坪だけの依頼にも対応している。

実施体制を図 2 にまとめた。事務局機能を有する「親方（代表）」を中心に，草刈りを頼みたい人（顧客）に営業をおこない，受注を受け，メンバーと調整し，作業を遂行する。作業をおこなったメンバーは，実施報告をおこない，報酬を支払う，といった体制である。事務局は，草刈り作業の実施に向けて，依頼者の対応（問い合わせ内容の確認，見積書の作成・送付，作業日の調整）や作業およびメンバーの調整（作業実施日や当日の行程，参加メンバー，備品の手配など）などをおこなう。実施の際は，作業の実施および内容の記録，実施報告書の作成・取りまとめ，情報発信（SNS での実施報告），作業実施後は，依頼者の対応（請求書，実施報告書の作

**表 1** 結成された草刈りグループの概要

| | |
|---|---|
| 名称 | 播磨畦師（はりまはぜし） |
| 目的 | 草刈りを通して地域とつながる |
| 設立日[1] | 2022 年 6 月 14 日 |
| メンバー数[2] | 24 名 |
| 実施内容 | 草刈り，刈草の処理，水路清掃，低木や竹の伐採・処理 |
| 実施エリア | 東播磨エリア |
| 実施場所 | 畦畔，ため池堤体 |
| 価格 | 有料（応相談） |

1）有料サービスの開始日を意味する。
2）一度でも草刈りに参加し，報酬を得たことがある者を意味する。

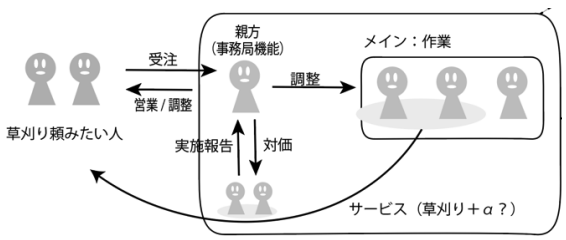


**図 2** 播磨畦師の実施体制

成・送付，入金確認），備品・消耗品の管理（機械のメンテナンス，ガソリンの補充など），参加メンバーへの支払い計算，支払いなどがある。その他にも，新規メンバーの勧誘やワークショップ開催，口座開設，補助金申請・報告書の作成，営業用のチラシの作成・修正，保険の加入・更新，などがある。

なお，事務局のメンバーは，筆者やA氏，B氏が担っており，播磨畦師の代表はA氏が務めている。

### 3.2 草刈りグループの実績

表3は，有償サービスを実施して以降（2021年6月14日～2022年8月31日の約15ヶ月）の実績をまとめたものである。実施回数は24件であり，依頼主は11の個人または組織，内訳は4組織，7個人である。実施場所は，耕作放棄地が11件，ため池・水路が7件，その他（空き地や神社など）が6件となっている。

参加メンバー（1回でも作業に参加したことのある者）は24人存在し，1人あたりの平均参加回数は4回，主要メンバーの平均参加回数は8.6回となっている。ただし，メンバーによって参加回数の差は大きく，1回のみ参加した者から，24回全てに参加した者もいる。また，1件あたりの参加人数は平均4人，最小2人，最大10人となっている。ため池堤体など，面積が大きく，人手がかかる作業は参加人数が多い傾向にある。売上は，合計約539千円であり，一件あたりの平均は約22千円となる。

### 3.3 草刈りグループの主要メンバー

播磨畦師の主要メンバーの属性を表3にまとめた。年齢は20～60代と幅広い。職業は会社員が多く，居住地は東播磨が多くみられる他，神戸市や大阪市もみられる。

A氏は明石市出身，播磨町在住である。明石市の公務員として2020年3月まで約30年間勤め，早期退職した。現在は，以前から趣味として取り組んでいたウインドサーフィンの体験教室を経営している。刈払い機の使用については，公園管理課に配置された際や自身が所有するプライベートキャンプ場の管理の際に使用しており，経験は豊富である。播磨畦師の代表を勤めており，筆者とともに，事務局を担っている。

B氏は大阪市出身・在住である。草刈りに関する修士論文を執筆するにあたって，播磨畦師のメンバーとなった。

C氏は兵庫県尼崎市出身，神戸市在住である。現在は神戸市内のメーカーに勤めている。自宅近辺の圃場に，次々とソーラーパネルが設置されていくことに疑問を持つと同時に，農業や農地のあり方に興味を持ち始めた。2017年頃から兵庫県などが主催する農業に関するセミナーに参加するようになり，週末には神戸市や丹波篠山市で援農活動をおこなっている。

D氏は稲美町出身・在住である。現在は会社員として勤務する傍ら，休日には両親が営む農業の手伝いをおこなっている。2012年頃に母親から「草刈り作業が辛いので私たちの代わりにしてほしい」と頼まれたことをきっかけに，月1回ほど休日に圃場周辺の草刈りをおこなっている。また，地域のため池堤体の草刈りや水路清掃にも年に2, 3回参加している。

E氏は神戸市出身，播磨町在住である。現在は，理学療法士として医療施設に勤務している。大学の頃よりアウトドアに興味を持ち，森と触れ合うなかで，林業や里山に興味を持つようになったという。

**表2　播磨畦師の実績**

| | | 備考 |
|---|---|---|
| 実施件数 | 24件 | 依頼主：11人・組織<br>実施場所：畦畔，ため池堤体，放棄地，その他 |
| メンバー数 | 24名 | のべ参加人数：96名<br>平均：4回/人（1～24回/人）<br>平均：4人/件（2～10人/件） |
| 売上 | 539,554円 | 平均：22,481円/件<br>（6,400円～75,000円） |
| メンバーの日当 | 333,500円 | 平均：14,792円/人<br>（500円～101,150円） |

資料：筆者作成（2022年3月時点）
1）期間：2021年6月14日～2022年8月31日の約15ヶ月

**表3　播磨畦師の主要メンバーの属性**

| | 属性 | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| | 齢 | 職業 | 居住地 | |
| 筆者 | 33 | 大学教員 | 加古川市 | ・「東播磨フィールドステーション」のコーディネーターを務める |
| A | 61 | 自営業 | 播磨町 | ・事務局を務める<br>・公務員を早期退職 |
| B | 24 | 大学院生 | 大阪市 | ・神戸大学院生。修士論文を執筆するために参画。 |
| C | 53 | 会社員 | 神戸市 | ・週末には援農活動を実施 |
| D | 50 | 会社員<br>兼業農家 | 稲美町 | ・休日に圃場周辺の草刈りを実施<br>・ため池堤体の草刈りや水路清掃にも年に2～3回参加 |
| E | 42 | 医療関係 | 播磨町 | ・林業や里山に興味を持つ。<br>・刈払い機の使用経験：あり |
| F | 41 | 会社員 | 明石市 | ・農業体験を促す一般社団法人の運営に携わる |
| G | 35 | 高校教員<br>大学院生 | 高砂市 | ・農業高校教員<br>・祖父が有する農地の存続に向けた営農活動を実施 |
| H | 34 | 会社員<br>兼業農家 | 高砂市 | ・IT企業勤務<br>・祖父から農地の一部を譲り受け休日に耕作を実施。 |

資料：聞き取り調査より筆者作成（2022年1月時点）
1）性別は全て男性である

F 氏は愛媛県出身，明石市在住である。大学進学を機に大阪へ移った後，結婚し子供が生まれたことをきっかけに明石市に移住した。現在は会社員として勤める傍ら，2018 年頃に明石市で市民農園を借りたことをきっかけに，援農活動を始めた。また，農業体験などを通した関係人口増加を目的とした一般社団法人（所在地：丹波篠山市）の運営に携わっている。

G 氏は高砂市出身・在住である。現在は大学院に通いながら農業高校の教員を務めている。祖父が高砂市内で農業を営んでおり，将来は農地を引き継ぎ，営農活動をおこなう予定にしている。

H 氏は高砂市出身・在住である。現在は IT 企業に勤める傍ら，祖父から農地の一部を譲り受け，休日に耕作をおこなっている。なお，JA が運営する直売所への出荷権は持つものの，収穫物のほとんどは自家消費している。

E 氏を除く全てのメンバーは，表 4 でみる作戦会議の際から関わるメンバーである。E 氏は，神戸新聞の記事をきっかけに播磨畦師を知り，2021 年 6 月からメンバーに加わった。

## 4. 結成プロセスの概要

結成プロセスは大きく 4 つのフェーズに分けられる（図 3）。以下，順に説明を加えていく。

①研究会の開催：先述したように，行政と大学の連携事業において，ため池の持続的管理に向けた活動をおこなってきた。そのなかで，ため池管理者・農業者が抱える課題の傾向を把握するために，事前アンケート調査を実施した（対象：ため池管理者，回収枚数：48，回収率 63.2%，配布時期：2019 年 6 月）。そのなかで，「堤体や畦畔の草刈り作業の継続実施についてどの程度，課題と思っていますか」と尋ねたところ，66%が「大きな課題」，28%が「やや課題」，6%が「課題でない」と答えており，ため池管理に関する他の課題に比べて，草刈りを最も多くの管理者が課題に感じていることがわかった。

そこで，著者らの他，事業者や銀行員を加え，草刈り問題に対してどのようにアプローチしていくべきか，研究会を計 12 回開催した（2019 年 4〜12 月）。研究会では，農業者の草刈りに対する問題意識のアンケート調査，先進事例の調査・共有，既存の草刈り代行業者の実態，ビジネスとしての草刈りの可能性や限界・課題，具体的なモデルのあり方などを検討した。また，草刈りには様々なスタイル（目的・方法）があること，そしてスタイルを確立し，引き継ぐ人材を育成していく者を「畦師」と呼称することなどを決めた。

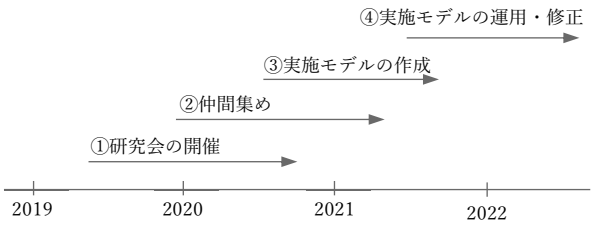


**図 3** 播磨畦師の結成プロセス

**表 4** モデル作成に向けた作戦会議の実施概要

| | 作戦会議（室内） | 作戦会議（現場） |
|---|---|---|
| 回数 | 6 回 | 3 回 |
| 実施日 | 2020/11/21，12/2，12/23，2021/1/20，3/17，6/7 | 2020/8/23，9/27<br>2021/1/30 |
| 内容 | ・モデル設計<br>・既存サービスの調査・共有 | ・労力のイメージ共有<br>・集落との仕組みづくり（草刈りへの参加） |

資料：筆者作成（2020 年 6 月時点）

②仲間集め：「草刈り人材の育成：「畦師」グループを作りませんか？」というタイトルでセミナーを実施した（2020/1/29 @東播磨 FS）。参加者は 34 名であり，播磨畦師の主要メンバー（表 3）の多くは，本セミナーにて確保した。本セミナーの広報は，東播磨 FS の Facebook ページによる投稿や口コミがメインである。セミナーの構成は，話題提供や提案，グループワークである。話題提供としては，草刈りグループの先発事例や設立の要点を共有した。そのうえで，畦師グループの具体例（イメージ）を投げかけ，畦師グループを作っていきませんか？と提案した。グループワークでは，畦師として活動してもよいと思う人，畦師グループに一度作業を委託しても良いと思う人，畦師グループの事務局を担っても良いと思う人，の 3 つのグループに分かれ，意見交換をおこなった。

③実施モデルの作成，④実施モデルの運用・修正については，以下に詳述する。

## 5. 実施モデルの作成

### 5.1 実施モデル作成の概要

表 1 や図 2 で紹介した実施モデルを作成するにあたっては，作戦会議（室内および現場）を計 9 回おこなった（表 4）。

作戦会議（室内）は，全 6 回おこない，どのようなモデルで実施していくのかを中心に議論を重ねた。その際，各メンバーが，なぜ草刈りに関わるの

か, 草刈りを通してどういったことを成し遂げたいか，といった動機（表 5 にて詳述）を共有したうえで, 具体的なモデルの設計に向けた議論をおこなうようにした。

作戦会議（現場）は計 3 回おこない，刈払い機を用いて作業をおこなった。そこでは，現役農家/兼業農家に刈払い機の使い方を教わりながら，「これくらいの広さや傾斜，草の繁茂状況だと，どの程度疲れるのか」などの感覚を共有するようにした。また, ため池堤体の草刈りをおこなった者も少なかったため, ため池管理組織がため池の堤体の草刈りを実施する際に参加させてもらい，経験を積んだ。その際，ため池管理者から，播磨畦師の仕組みに対する感想やアドバイスも頂戴するようにした。

### 5.2 主要メンバーの参加動機

表 5 は，播磨畦師に関わる動機について主要メンバーにヒアリングをおこなった結果をまとめたものである。なお，ヒアリング時期は 2022 年 1 月までに実施した。その結果，「農村への貢献意欲」「仕組みづくりに対する興味」「学習意欲」「交流意欲」「活動の充実感」「知識・技能の活用」の 6 つに分類された。

「農村への貢献意欲」としては，自身が感じている地域課題の解決, 播磨畦師の活動を通して知った地域課題の解決，関係人口の増加が挙げられる。なかでも D 氏は最も強い動機として振り返っていた。表 3 でみたように，D 氏は兼業農家であり，自身も日常的に草刈りをおこなっているなかで, 草刈りが地域の大きな課題であると肌で感じている。播磨畦師の取り組みを通して課題を解決し, 地域に貢献したいと振り返っていた。

「仕組みづくりに対する興味」は，新たなビジネスやシステムの創造意欲やそれらを作る過程への興味などにあたる動機である。なかでも B，G 氏は最も強い動機として振り返っていた。両氏はいずれも，播磨畦師の活動を通して，草刈りの担い手に着目しているという共通点がある。B 氏は高齢者が楽しく働ける仕組み, G 氏は農業高校の生徒が地域や農業に関わる仕組みの創造に関心を抱いている。B 氏は，自身が退職した後を見据えて「老後もお金はいるのだからどうせなら楽しみながら働きたいし，楽しみながら働ける仕組みを作れば他の高齢者のためになる」と述べていた。

「地域や農業に関する学習意欲」は，播磨畦師の活動をとおして農業や地域について学びたいという動機である。なかでも C 氏と H 氏は最も大きな動機として挙げている。C, H 氏は，援農活動や兼

**表 5　継続参加の動機**

| 発言内容 | 発言者 | 分類 |
|---|---|---|
| 実際に草刈りが地域で課題であると感じており，将来を考えると漠然とした不安がある。その解決に繋がるかもしれないし自身も助けてもらえるかもしれない。 | D* | 農村への貢献意欲 |
| 参加した際に，これまで知らなかった地域課題が多くあると知り，貢献したいと考えるようになった。 | E,H | |
| 草刈りを入口に農村の関係人口の増加に貢献したいと思っている。 | C,F | |
| 定年退職後も生きていくのにはお金がいる。どうせ働くなら楽しみながらがいいし，そんな仕組みを作ることで自分以外の高齢者のためにもなると考える。また，代表として活動に参加する中で自分が中心となって新たな仕組みを作る過程にやりがいを感じるようになった。 | A* | 仕組みづくりへの興味・やりがい |
| 今現在のためというよりも将来農家の高齢化や減少がさらに進行したときに備えて仕組みを作っておきたい。 | A | |
| 地域と参加者双方に利益のある仕組みをどうすれば作れるのかどうかに興味がある。 | C | |
| 農業高校で働く中でせっかく農業に興味があっても求人がなく別の進路へ進む生徒を見てきた。そういった生徒が地域や農業に関われる仕組みを作りたい。 | G* | |
| 農業についてのセミナーに通ったりする中で，一つの地域に根付くよりも多くの地域を訪れ交流を広げながら地域や農業について学びたいと考えるようになった。 | C* | 地域や農業に関する学習 |
| 参加するまで地域の問題について全く知らなかったが活動の中で興味を持った。これからも活動に参加したり他の参加者と交流しながら学びたい。 | E | |
| 農業について学びたい。そのためには地域に入る必要があるが，その手段として草刈りは適していると思った。 | F | |
| 自分と同じような悩みを持つ農業者と知り合いたい。悩みを共有したり新しい取り組みがあれば教えてもらいたい。 | D | |
| 播磨畦師の活動を通して依頼者である農家との繋がりを作り，農業について学びたい。 | H* | |
| 地域農業者との交流がない時でも作業の合間に他の参加者とざっくばらんに話す時間が好き。 | C | 依頼者・参加者との交流 |
| 関わることの無かった地域や人と関わりを持つのは楽しい。東播磨フィールドステーションにもきっかけが無かったら一生行く機会はなかったと思う。 | E | |
| 活動を通して新たな関係性を持つことができる。依頼者や地域の人もそうだし，参加者についても他の地域とはまた違った人と関われるのが楽しい。 | F* | |
| 草刈り作業はしんどいがやり遂げた後は爽快感がある。 | A | 作業の充実感 |
| 普段の仕事と違って自分たちの働きの結果が目に見えるし身体を動かせる。 | F | |
| 人の困りごとの解決にもなるし自分たちの働きを金銭が肯定してくれる。 | A | |
| 約 10 年間草刈りをしてきた経験を活かして草刈りを教えることで担い手を増やしたい。 | D | 技術の伝授・獲得 |
| 元々アウトドアが好きでチェンソーや草刈り機といった機械に興味がある。学んだことを実践する場が欲しかった。 | E* | |

資料：聞き取り調査より筆者作成

1）＊は発言者が最も強調していた動機を意味する。

業農家として，農業に従事しており（表 2），栽培スキルを向上させたいという思いを持つ。

「交流意欲」は，依頼者や他の参加者と関わり，コミュニケーションを重ねたいという動機である。なかでも F 氏は，最も強い動機として振り返っていた。F 氏は，休日には援農活動をおこなっており（表 2），職場では出会えない人々との出会いがあることが，活動の楽しみとなっている。

「活動の充実感」は，身体を動かしたり，その結果が目に見えることに対する充実感や依頼者からの感謝の言葉や報酬，仕組みづくりによる充実感がみられる。

「自身の知識・技能の活用」は，草刈りが実施可能な者を育成していきたいといった動機や，自身が持っている技能を活用・上達させていきたいといった動機である。D 氏は最も主要な動機である「草刈りに関する地域課題の解決」の手段として「自身が草刈りを教えたい」という思いを述べている。E 氏は，2021 年にチェンソーと刈払い機の扱いについての講習会に参加しており，座学で学んだ知識を実践したいという考えを持っていた。

### 5.3 実施モデル作成に向けた協議

表 6 は，実施モデルを作成するにあたって，筆者からメンバーに提示した協議事項をまとめたものである。具体的には，基本設計として，コンセプト，ターゲット，運営体制として，ヒト，モノ，カネ，情報・広報がある。以下，各項目における議論の内容やその結果についてみていく。

コンセプトを作るにあたっては，何のために草刈りをするのか，という点を中心に意見の交換・共有をおこなった。具体的には，表 5 でみられた動機について対話を重ねた。その結果，「地域とつながる」手段として草刈りを位置づけ，草刈りを目的化するのではなく，手段として位置づけることを決めた。そして，「地域とつながる」1 つの工夫として，依頼者に対して「草刈りを一緒にしてもらえたら 10% 値引きをする」ことをパンフレットに明記した。

**表 6　モデル作成に向けた主な協議事項**

| | | 協議事項 |
|---|---|---|
| 基本設計 | コンセプト | 何のために草刈りやるか，そのためにどんな方法で草刈りするか |
| | ターゲット | 実施エリア，対象者および実施場所，作業内容 |
| 運営体制 | ヒト | 各人の役割（事務局），作業参加者の保険 |
| | モノ | 備品・消耗品 |
| | カネ | 価格帯，作業参加者への報酬，準備資金，見積もり・契約方法，事務局費 |
| | 情報・広報 | パンフレット |

資料：筆者作成（2020 年 6 月時点）

ターゲットについては，実施エリアや対象者および実施場所，作業内容について議論した。その結果，実施エリアを東播磨全域とし，主な対象としては，ため池堤体の草刈りや畦の草刈りに困っている現役農家とした。なお，耕作放棄地については，依頼があれば対応するが，メインはため池管理者や現役農家を対象としたサービスであることを共有した。また，作業内容は，草刈りを中心とするが，その他の依頼にも対応できるようにしていきたい，という意向を固めた（例えば，水路清掃の他，庭の草むしりや庭木の剪定など独居老人の困りごとへの対応など）。

運営体制（ヒト）については，各人の役割（事務局）や，作業参加者が加入する保険について議論した。作戦会議において，様々なアイデアが出されたが，それが実施可能か，さらには継続した活動になるかは，事務局の能力に依存するところが大きい。そこで相談の上，誰が，何人で事務局を担うのか，事務局内での役割分担をどうするのかについて議論した。その結果，活動初期は，筆者と A,B 氏が担うことを決めた。作業参加者が加入する保険については，任意団体として定款を作成し，播磨畦師として加入するようにした。

運営体制（モノ）については，刈払い機や燃料，ゴークルや軍手など，草刈りを安全に実施できるような備品が必要であること，そして事務局で補助金を申請し，それらを用意することを決めた。

運営体制（カネ）については，価格帯や作業参加者への報酬，準備資金，見積もり・契約方法，事務局費について議論した。価格帯については，まずは有償か無償でおこなうか，という点から議論した。その結果，持続した活動に向けて，有償でサービスをおこなうことを決めた。具体的な単価・価格については，実績がなく不透明であったため，後述するパンフレットには，1 回 5,000 円～と表記をしたうえで，「金額は目安であり，面積，土地・草の状況，年間実施回数，草の回収の有無によって異なります」，「集落の草刈りに参加します（多面的機能支払いの活用も相談ください）」と明記した。作業参加者への報酬は，支払うべきか否かという点から議論をおこなった。その結果，参加者のモチベーションを下げないためにも，報酬があった方がいいこと，ただし，参加者にとっては，生業というよりも地域課題の解決を志向したコミュニティビジネスとしての側面が強いため，お小遣い程度の報酬を支払う

**写真 1**　作成したパンフレット

新戸新聞　（第3種郵便物認可）

草刈り集団「播磨畦師」

東播拠点 有志で結成

集落の草刈りは手間がかかるけれど、専門業者に委託するには費用がかかる。そんな農家らの悩みに応えようと、東播地域の有志が草刈りグループ「播磨畦師」を結成した。各地のため池協議会などを通じて依頼を募り、「斜面だけ」などの細かい要望にも安価で応じる。作業を通じ、地域住民らとのつながりを深めることも目指す。（若林幹夫）

グループは、マリンスポーツの普及団体代表、集落営農について研究する大学院生ら10～60代の約10人。東播磨に多いため池の活用などを研究する拠点「東播磨フィールドステーション（FS）」（加古川市神野町神野）が昨年1月に開いたセミナーに参加した。セミナーでは、農家の高齢化で草刈りが共通課題となっていることや、担い手の確保について話し合われた。

農地のあぜ、ため池周辺の草刈りが不十分だと、害虫の発生や、堤体の傷みが見つかりにくいことなどにつながる。セミナーの趣旨に賛同した有志たちには非農家も含まれ、昨年8月に稲美町の農地で草刈り機の使い方を学んだ。今年1月、高砂市の阿弥陀西部ため池協議会に呼び掛け、同市阿弥陀町阿弥陀の竿池と第池の周辺で行われた草刈りに参加した。

現在は、草刈り技術の向上とグループの認知度を上げるため、加古川市や稲美町内の水利組織などに共同作業を呼び掛けている。ゆくゆくは農家から個別に依頼を受けることが目標。東播磨の3市2町を対象地域とし、「きつい斜面だけ」「庭の草むしり」などにも対応する。料金は「1回5千円から」とした。

代表の神谷孝浩さん(60)＝播磨町＝は「草刈りだけでなく、地域と交流することでいろんな要望に応えていきたい」と話す。依頼は事務局のメール（harimazushi@mail.com）か神谷さん☎090・6205・9710。東播磨FSでは、新たなグループの設立支援にも取り組む。

**細かい要望　安価で対応**

農家の悩み解消、地域交流へ

**写真 2**　神戸新聞に掲載された記事（2021.6.3）

ことを決めた。また，1 回の草刈りに対して，予想以上に参加者が多く，一人当たりの報酬が少なくなる場合も，参加を制限せず，参加者を増やしコミュニティケーションを図ることを決めた。また，参加者への報酬は，作業終了ごとに支払うことが理想ではあるが，事務局の負担を減らすことやメンバー間の交流を深めるという意味で，メンバーが集う機会を作り，その際に支払う（年に 1 回）ようにした。準備資金については，先述したように補助金を申請し，備品・消耗品や後述するパンフレット作成費を捻出した。見積もり方法については，1 回 5,000 円～という形でスタートし，経験を積みつつ，適正な見積もり方法や価格を設定していくことを決めた。ただし，ため池堤体など集落住民と作業を実施する場合の見積もり方法は異なる形式をとった。具体的には，メンバーが受け取る報酬金額は，各集落や水利組織で決めてもらうようにした。なぜなら，作業参加者に支払う報酬は，各集落や水利組織で異なっているためである。事務局費については，売上の何割を確保するか，始動しながら確立していくことを

**写真 3** 作業の現場の様子
（左上から時計周りに依頼 No2,3,5,7 の現場）

決めた。契約方法については，単発・年間契約を設定し，年間契約の場合は割引するようにした。

運営体制（情報・広報）としては，パンフレットを作成し，配布をするようにした（写真 1）。1,000 部印刷し，主に東播磨県民局を通して，関係市町やため池管理者，ため池に関するイベントやセミナーの開催時に配布するようにした。パンフレットには，先述したコンセプトや価格設定の他，メンバーのプロフィールや納品までの流れ，東播磨フィールドステーションの概要や大学と行政の連携体制，現場作戦会議にて共に草刈りをおこなった現役農家や水利組合の方の感想を載せるようにした。パンフレット以外には，新聞等へのアプローチをおこない，現場作戦会議の様子や，有償でサービスを請け負うことを記事化した（写真 2）。

## 6. 実施モデルの運用・修正

### 6.1 有償サービスの詳細

依頼主や現場の情報，作業内容・参加者を表 7 にまとめた。依頼の単位は，個人と組織があり，個人 7，組織 4 からの依頼があった。組織では，水利組合（No.3），土地改良区神社（No.7），神社（No.9），保育園（No.10）がみられる。

続いて，作業内容や参加者についてみていく。作業実施日をみると，リピーターが多く見られることがわかる。最もリピートが多いのは No.3 や 5 の依頼者であり，各 5 回おこなっている（写真 3）。No.3 は，水利組合であり，農業用にはほとんど利用しなくなったため池堤体の草刈りや，水路の草刈り・清掃の依頼であった。水利委員がこれらの作業を担っていたが，人数の減少に伴い，継続して実施するこ

表 7　播磨畦師の活動実績

| 依頼主について | | | 現場について | | | 作業内容・参加者 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No. | 単位 | 居住地 /所在地 | 場所 | 地目 | 面積(坪) | 実施日 | 作業内容 | 参加人数 |
| 1 | 個人 | 明石市 | 高砂市 | 耕作放棄地 | 265 | 2021.6.14 | 草刈り | 4 |
| 2 | 個人 | 高砂市 | 高砂市 | その他 | 82 | 2021.6.28 | 草刈り・回収 | 6* |
| | | | | | | 2021.12.28 | 草刈り | 5 |
| 3 | 組織 | 稲美町 | 稲美町 | ため池・水路 | - | 2021.7.11 | 草刈り | 8* |
| | | | | | | 2022.2.20 | 草刈り，木の伐採・処理，水路清掃 | 6* |
| | | | | | | 2022.6.24 | 木の伐採・処理 | 2* |
| | | | | | | 2022.7.23 | 草刈り | 3* |
| | | | | | | 2022.7.31 | 木の伐採・処理 | 3* |
| 4 | 個人 | 東京都 | 加古川市 | その他 | 244 | 2021.7.18 | 草刈り | 3 |
| | | | | | | 2021.9.11 | 草刈り | 3 |
| 5 | 個人 | 東京都 | 高砂市 | 耕作放棄地 | 607 | 2021.8.29 | 草刈り | 6 |
| | | | | | | 2021.12.11 | 草刈り | 2 |
| | | | | | | 2022.5.15 | 草刈り | 2 |
| | | | | | | 2022.7.30 | 草刈り | 2 |
| | | | | | | 2022.8.28 | 草刈り | 4 |
| 6 | 個人 | 東京都 | 稲美町 | 耕作放棄地 | 117 | 2021.10.9 | 草刈り，竹の伐採 | 3 |
| | | | | | | 2021.10.23 | 竹の伐採・処理 | 3 |
| 7 | 組織 | 稲美町 | 稲美町 | ため池 | - | 2021.11.28 | 草刈り | 10* |
| | | | | | | 2022.2.13 | 草刈り | 6* |
| 8 | 個人 | ? | 播磨町 | 耕作放棄地 | 117 | 2022.5.10 | 草刈り | 2 |
| | | | | | | 2022.8.27 | 草刈り | 3 |
| 9 | 組織 | 播磨町 | 播磨町 | その他 | - | 2022.6.5 | 草刈り | 5 |
| 10 | 組織 | 明石市 | 明石市 | その他 | - | 2022.8.6 | 草刈り | 3 |
| 11 | 個人 | ? | 播磨町 | 耕作放棄地 | 200 | 2022.8.31 | 草刈り | 2 |

資料：筆者作成（2022 年 8 月時点）
1）*は，播磨畦師以外の他の参加者があることを意味する。

とが困難になっており，依頼に至った。筆者は日頃から，ため池や農地の管理体制などに関する相談を受けており，そのなかで播磨畦師を紹介し，実施に至った。また，No.7 の土地改良区は，No.3 の水利組合と隣接している集落に位置し，No.3 の水利組合から播磨畦師の存在や評判を知り，依頼に至っている。No.5 の依頼者は，農地を高砂市に所有しているものの，東京在住であり，定年までの 3 年の間，依頼したいとのことであった。これまで，近隣住民に草刈りを依頼していたが体調不良で断られるようになったところ，神戸新聞の記事で播磨畦師の存在を知り，問い合わせがあった。

作業内容については，上述したように草刈りや刈り草の回収，水路清掃，木の伐採・処理，竹の伐採・処理がある。なお，刈り草の回収については，活動を始めた当初は，刈り草を収集し，軽トラックに積み込み・運搬していたが，労力が大きいため，刈り草を粉砕する機械（ハンマーナイフモア）を購入し，対応するようにした。なお，草刈り作業前後に集落の案内を依頼し，集落が置かれた状況を視察するフィールドツアーや，集落住民との交流会を開催し，草刈りを単なる作業としてではなく，交流や学習の場として機能するような配慮をおこなった。

### 6.2 主要メンバーの参加状況

表 8 は，主要メンバーの作業への参加回数および受け取った報酬を整理したものである。参加回数をみると，A 氏が 24 回と突出して多く，B 氏が 16 回と続く。その他のメンバーは，10 回未満となっている。年ごとにみると，2021 年は A,B 氏，2022 年は A, E 氏が多い傾向がみられる。筆者は，それぞれ，6 回，0 回参加している。報酬をみると，最も多いのが A 氏，次いで B, E 氏が多い。

表 8　播磨畦師の主要メンバーの参加状況と報酬

| | 作業参回数 | | | 報酬 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 計 | 2021 年 | 2022 年 | 計 | 2021 年 | 2022 年 |
| 筆者 | 6 | 6 | 0 | ¥11,300 | ¥11,300 | ¥0 |
| A 氏 | 24 | 13 | 11 | ¥91,650 | ¥33,700 | ¥57,950 |
| B 氏 | 16 | 13 | 3 | ¥50,650 | ¥33,700 | ¥16,950 |
| C 氏 | 5 | 4 | 1 | ¥11,700 | ¥6,700 | ¥5,000 |
| D 氏 | 4 | 1 | 3 | ¥26,550 | ¥2,800 | ¥23,750 |
| E 氏 | 9 | 2 | 7 | ¥50,450 | ¥6,200 | ¥44,250 |
| F 氏 | 5 | 3 | 2 | ¥12,200 | ¥4,700 | ¥7,500 |
| G 氏 | 4 | 3 | 1 | ¥7,700 | ¥7,200 | ¥500 |
| H 氏 | 6 | 4 | 2 | ¥34,300 | ¥10,300 | ¥24,000 |

資料：フィールドデータより筆者作成
1）作業（有償サービス）は全 24 回実施

これら主要メンバー以外の者は，1 度草刈りを経験したいといって加入し，それ以降参加していないメンバーや，2～3 回参加したメンバーなどがいる。

### 6.3 実施モデル修正に向けた課題の整理

有償サービスを実施して 1 年ほどが経ったことを受け，これまでの活動を振り返るワークショップを実施した（2022/5/13＠東播磨 FS）。参加者 12 名であり，いずれも播磨畦師メンバーである。

表 9　播磨畦師の理想と現状のギャップ

| ギャップ | 理想 | 現状 | 考えられる要因 |
|---|---|---|---|
| 依頼者や作業現場 | 現役農家が営農活動をしやすくなるよう，草刈りを実施する | 現役農家から受注はない | ・播磨畦師（都市住民）への信用が低い。<br>・価格の不明瞭さ<br>・まだそこまで危機的状況ではない<br>・広報不足 |
| | ため池管理者からの依頼に対応し，ため池の持続的管理に貢献する | ため池管理者から受注は，予想より少ない | |
| | 地域住民と交流しながら草刈りを実施 | 放棄地での草刈りは交流がない | ・農地所有者が遠方に住んでいる |
| 実施メンバー | メンバーの脱固定化（人材育成） | メンバーの固定化 | ・日程調整の困難さ<br>・草刈り作業のみになりがち：ハードル高い |

資料：振り返りワークショップ（2022 年 5 月 13 日実施）をもとに筆者作成

本ワークショップでは，著者がファシリテーターを務め，モデルの作成プロセスや有償サービスの実績，各メンバーの参加状況の振り返りをおこなったうえで，報酬の支払いをおこなった。そして，モデル作成時に描いた理想と現実のギャップについて意見を出し合ったうえで，ギャップが生まれている要因について話し合った。表 9 は，その内容をまとめたものである。

1 つ目のギャップは，依頼主や作業現場に関するギャップである。理想は，現役農家が営農活動をしやすくなるよう，草刈りを請け負うことや，ため池の持続的管理に貢献することであった。しかし，現状は，現役農家からの受注はなく，ため池管理者からの依頼も予想より少ないものであった。これらのギャップが生まれる要因としては，まず，都市住民がメインで構成されている播磨畦師への信用が低いことが挙げられる。実際，農作業経験に長けている者から「都市住民が有償に値する草刈りができるとは思ない」という反応を頂戴したこともある。また，一度草刈りを頼んだとしても，継続的に実施してもらえるのかという不安を口にする依頼者もいた。その他の要因としては，価格の不明瞭さが挙げられた。先述したように，パンフレットには具体的な単価は記載できていないため，依頼者は問い合わせを躊躇した側面があったことと考える。また，「数年後はわからないが，今のところはなんとか自分達でできているから依頼していない」という側面も考えられる。その他，地域住民と交流をしながら草刈りを実施し，地域とつながることを理想に掲げていたが，実際は放棄地での草刈りにおいて地域交流がとれる機会は少なかった。要因としては，農地所有者が遠方に住んでおり，物理的に困難であることが挙げられる。

2 つ目は，実施メンバーに関するギャップである。理想は，メンバーの参加状況が大きくは偏らないこと，かつ，初心者であっても経験を通して作業が実施可能になるよう成長を促すことであった。しかし，播磨畦師に在籍している 24 名のうち，参加回数が比較的多いのは主要メンバーの 9 名であり，そのなかでも，参加回数は偏る傾向にある（表 8 参照）。また，作業参加者は，ある程度，草刈りの実施経験が既にあった者であり（表 3 参照），初心者が成長し，草刈りを問題なく実施できるようになった者はみられない。これらの要因としては，日程調整の難しさが挙げられる。A 氏は早期退職をしており，平日も実施可能な日が多いが，その他のメンバーは勤務日である場合が多く，その結果，A 氏の作業日数が突出して多くなっている（表 8 参照）。

## 7. 考察

### 7.1 草刈りグループ結成のポイント

以上にみてきたプロセスを経て，都市住民主体の草刈りグループは結成された。実績そのものの数値（例えば，有償サービス実施件数や依頼主の数など）については，様々な評価があると考えるが，少なくとも，プロトタイプが生み出された，という点については評価に値すると考える。本節では，草刈りグループを結成する際のポイントを 2 点述べる。

1 つ目は，草刈りを目的化せず，メンバーの動機を考慮に入れた，コンセプト・モデルの設計をおこなうことにある。本グループの主要メンバーは，2020/1/29 に開催したセミナーに参加したメンバーである。そのメンバーが，なぜ草刈りに関わるのか，草刈りを通してどういったことを成し遂げたいか，といった動機を共有したうえで，具体的なモデルの設計に向けた議論をおこなったことがポイントであったと考える。そこで挙げられた動機は，「農村への貢献意欲」や「仕組みづくりに対する興味」，「学習意欲」，「交流意欲」などであり，そのためコンセプトを「地域とつながる草かり」とし，地域とつながる手段として草刈りを位置づけ，具体的なモデルの設計をおこなった。これらのコンセプト・モデルの作成・運用は，メンバーの動機に応えうるものであったからこそ，主要メンバーは継続して参加している（表 8 参照）ことと考察される。

2 つ目は，段階に応じてコーディネーターの役割を変化させ，グループの自主性を育むことである。

「②仲間集め」の段階（図 3 参照）では，コーディネーター（筆者）が主導し，企画・実施をおこなっていた。「③モデルの作成」段階では，ファシリテーターとして，動機に関するメンバー間の対話の促進やそれを反映したコンセプト・モデルの作成をサポートすることが重要な役割であった。そのうえで，それを実現するために事務局を担う人材を確保し，体制を整えることが大きな役割となる。またこの段階では，ネットワーカーや情報提供者としての役割も重要であったことと考える。例えば，現場作戦会議を実施するにあたって現役農家や地元水利組織の仲介，補助金確保のための支援メニューの探索・申請，パンフレット作成にむけたデザイナーの仲介，先進事例や他事例の収集と共有，などがそれに当たる。「モデルの運用」段階では，翻訳者やネットワーカーとしての役割をより強めることとなる。この段階では，都市住民と集落や行政との交流が盛んにおこなわれており，各主体が持つ価値観や意向を翻訳し，対話を促す場づくりをおこなう必要があった。こういった，段階に応じて役割を変化させ，グループの自主性を育んできたからこと，コーディネーターが参加しなくとも，実施可能な状態になったと考える（表 8 参照）。

### 7.2 展開課題

続いて，本研究で紹介した播磨畦師のような，有志を募って結成する草刈りグループを複数生み出していくにあたっての課題を 2 点述べる。

1 つ目は，草刈りをしてもいい/したいという個人と，草刈りを実施するメンバーを増やしていきたい個人・組織（例えば，水利組合や土地改良区，多面的機能支払活動組織，営農組合など。以下，「草刈り組織」と呼称する）が，出会う場を確保することである。表 9 で述べたように，都市住民を主体としたグループに対する信用は低く，予想していたよりも受注は少なかった。しかし，播磨畦師という組織ではなく，そこに参画する個人と草刈り組織構成員との間には，対話を通した信頼・信用関係が構築されていた。例えば，草刈り組織のなかには，「都市住民に草刈りをしたい人などいるはずがない。ましてや，草刈りを過不足なく実施できる都市住民などいない」という固定観念を持つ者もいた。しかし，活動を通していくなかで，「彼ら（都市住民）が，なぜ農村に興味を持ち，草刈りをしようとしているのか，なんとなく理解することができた。彼らのなかにも草刈りが上手な者もおり，任せられると思った」という感想をもつ者もいた。こういった，個人間の信用・信頼関係を構築していくために，まずは出会う場づくりが必要であると考える。

2 つ目は，そういった場を誰（主体）が創造するか，そしてそこでの諸活動を誰がコーディネートするか，という課題である。本事例では，行政と大学による連携事業のもと，東播磨 FS という物理的な場および人材が確保されていたが，様々なパターンが考えられる。地域ごとで存在する主体やネットワークが異なるため，答えは存在しないが，継続したコーディネートができる体制を整える必要がある。本事例でみた播磨畦師においても，自律的に活動がおこなえてからも，筆者が相談役として，時にはコーディネーターとして継続的に関わっている。

## 8. まとめ

本研究は，東播磨地域におけるアクションリサーチを通して，都市住民を主体とした草刈りグループを結成する際に留意すべきポイント，そして複数の草刈りグループを結成していくにあたっての課題を明らかにした。

留意すべきポイントとしては，①草刈りを目的化せず，メンバーの動機を考慮に入れた，コンセプト・モデルの設計をおこなうこと，②段階に応じてコーディネーターの役割を変化させ，グループの自主性を育むこと，が挙げられた。そして，展開課題としては，①草刈りをしてもいい/したいという個人と，草刈りを実施するメンバーを増やしていきたい個人・組織が出会う場を確保すること，②そういった場および活動をコーディネートする人材をどのよう確保するか，という点が挙げられた。

### 注釈

注 1)東播磨 FS は，3 大学（神戸大学大学院農学研究科，兵庫県立大学地域創造機構，京都大学大学院農学研究科）と東播磨県民局との連携協定（2018 年 6 月）のもと，東播磨県民局が開室し，3 大学が管理・運営を担っている。

### 引用文献


1) 木原奈穂子，中塚雅也（2020a）：地域における畦畔管理作業受託の実態と展開課題－兵庫県丹波篠山市を事例として－，農業経済研究，91(4)，431-436.
2) 木原奈穂子，中塚雅也（2020b）：集落における畦畔管理請負の組織づくりと展望，農林業問題研究，56 (2)，70-75.
3) 高瀬麻以・荻野亮吾・似内 遼一・深谷麻衣（2022）「地域コミュニティを対象にしたアクション・リサーチ論のレビュー」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』6，140-16.